

グループ紹介

子供の瞳に魅せられて

〈劇団にんじん〉

昭和五十五年四月、長泉町立南幼稚園のお母さん方十三名で園児のための劇を演ずるサークルを結成したのがこの劇団の始まりです。シナリオから衣装や大道具、演出も役者もすべて手づくりの劇団ですが、口コミで評判が広まって、御殿場や大仁の保育園からも公演を依頼されるほどになりました。

それぞれの家庭や仕事をやりくりして、毎週木曜日の午前中に公民館で練習しています。

「ピーターパン」や「不思議の国のアリス」に子供たちの目が輝き、舞台も客席もなく共に歓声をあげる子供たちに、いつまでも夢を失わずにいてほしいと意欲的に取り組んでいます。

連絡先 長泉町下土狩一五四九の四
電話 〇五五九(86)〇〇六五
代表者 大島ふみ子



地道な活動

二十六年

(静岡点訳)

奉仕の会



昭和三十八年六月、県立静岡盲学校に通う生徒のために点訳本を作り始め、現在会員数九十名、年齢は二十代から七十代と幅広い方々が参加している。当初は点訳本だけだったが、現在は字の大きな拡大図書、録音テープ作りの三部門が確立し、息の長い活動が続けられている。点訳本、拡大図書各千六百冊、録音テープ九百本。また、内容も生徒の要望に答えて文学、医学、絵本、料理の本など大変豊富である。一冊の本を点訳するのに早くても一か月。何年もかけて文学全集を完成させた会員さんもいらっしやるとか……。

「点訳は地味な活動だが、生徒さんの心の糧になることを願って、又自らのライフワークとしてこれからも続けていきたい」という会長さんの言葉にやさしさと頼もしさが感じられた。

連絡先 静岡市曲金六丁目一―五
県立静岡盲学校内
電話 〇五四三(83)七三〇〇
代表者 田中ちえ

自分の意見がもたらいいですね

〈掛川・女性史学習会〉

女性問題を勉強したい、身辺から掘り起こしたい、と、講師を招いて講座を開いています。九年前、身近に女性問題の勉強会がなかったの、「では私たちが」と発足しました。

二年目からしばらくは、万葉集の女性など文学中心でした。大変な人気で百七十名も在籍したこともあり、女の心が華やぐものを求めていることを感じたそうです。

けれども、本来の女性問題にテーマをしほりたいと、あえて路線を修正し、女性史や福祉などをテーマにして今日に至っています。

今年十月まで四回で、「女たちが変えるアメリカ」をテキストに講座をもち、六十名の在籍です。講座の企画は七名の女性史学習会メンバーですが、テーマは学習の中から自然に「こんどはこれを」と決まります。毎年受講生の三分の一ほどが新人です。

様々な勉強でマスコミの話題の背景も見えて、「マスコミに簡単には踊らされないわ」と笑顔でした。

連絡先 掛川市宮脇三八八
電話 〇五三七(22)七三三九
代表者 榛葉 石子



劇団夕やけ

ヘレン・ロウィーナ・マックギルさん

略歴 ニュージーランド出身。学生時代世界旅行の際、日本で影絵劇に魅せられ、影絵劇団員となる。
1980年、劇団夕やけを創立。現在引佐町奥山に本拠をおく。



「わっ、外人だ。でもぼくたちのために一生懸命やっているんだ。」
地方公演で子供たちと出会って、こう思ってくれたら、そこに私が外国人であること、日本でやっていることの意味が出てきます。

子供は先入観がないから、素直に友達になろうとしますし、影絵もきれいで、珍しいと夢中になります。言葉で教えられない小さな子にも、影絵やお芝居でメッセージは伝えられると思うのです。

日本の子供にとって大切なメッセージは何かいつも考えます。

先日、飯田市のフェスティバルでは「三枚の札」をやりました。これには、年寄りの知恵を尊敬しながら年寄りを大事にみていこうという思いがこもっています。日本は今、高齢化社会に向かっていくのですから。

また、十一月の引佐町のフェスティバルでは、私の国ニュージーランドを舞台にした影絵を公演します。キーウィの楽しい話ですが、「自分の国さえよければと考えると問題は解決できないよ、手をつなぎましょう」というものです。自然破壊、オゾン層の問題など、今の子供が大きくなるころは、本当に国と国とが手をつながないと

解決できないものがたくさんあるわけですね。大事なメッセージは、子供たちが小さいうちに伝えたいと思うのです。

私の願いは、見終わってからお母さんや保母さんが、子供に一声かけてくれないかな、ということ

です。
「なんであんなったのかな。あんなことをしたのかな」と、さりげなく子供に考えるきっかけを作ってくれたら、そして「なんでかな」と子供が考えたら、私たちのメッセージが少し届くわけですから、うれしいのです。そういうことが、芝居を通してできる情操教育だと思っっています。

日本の子供の生活には、形式にこだわるとか、機械的に片付けてよしとするところがありますね。

おとなが「今」を一生懸命生きているのはわかるのですが、私は一人一人が幸せかどうかを大切にしたい。だから根本の人間的なこと、思いやりは小さい時から育てていきたいのです。「迷惑をかけるのはダメ」「なぜ?」「叱られるから」ということでは余裕がありません。相手はどう感じるかを考える子でなくてはね。

私は十八歳で海外旅行に出たのですが、父は「お前が決めたのなら、自分で責任をとりなさい。」と言いました。まわりも子供に一人の人間として接していました。だから日本のようにきまりに頼るの

は少なく、相手はどう思うかと、小さいうちから考える余裕があるように思っています。

劇団員二人でやっているのも、引佐町に活動の拠点をおくことにしたのも、
その人間的な余裕を大切にできることと、私のしたいことがもう一段上のものにできることから

です。
二人で活動すれば、より安く多くの子供と影絵で出会えるし、研究する時間も生み出しやすい。また、地元や町の人との触れ合いにも人間的な生活を感じます。それに、影絵や人形劇に興味を持ってくれる人を広げたかったのですが、公民館での講習、さらに今年十一月には人形劇フェスティバルをここで開くことになり、思ったよりずっと早く充実してきました。公演は、見てくれる子供にとって一回しかない出会いです。自分の心からの一滴をしばらく出して出会いたいのです。

女と家族の

交又点

沖藤典子

コンパニオン出版

人生八十年時代の女性にとって仕事とは、夫婦とは、老後とは、という問題を冷静に分析し、自らの体験を生かして具体的にまとめられている。

彼女は、怠け者だから仕事を続けて来たと言う。家庭に入って自立することの方が難しいと言うのだ。女性が仕事を続ける上で起こる様々な障害を乗り越えるための三つのタイプも紹介されている。自力エンジンがんばり型、他人のエネルギー拝借型、助手席運転型である。

家族の中でも重要なポイントになる夫婦の関係については、「一心同体」は幻想でしかないこと、その幻想に縛られる危険性、そして「異心別体」夫婦になるためにそれぞれが自立しなければならぬことを指摘している。

普通の妻たちにとって、それが困難であるの言うまでもない。しかし、妻が変わらなければ夫は変わらないうらう。

そして、女性にとって切実な老後のこと、親の老後、夫の老後、自分の老後、と、女だけが三つの老後を抱えている現状も取り上げられている。

日本では老人介護が、在宅主婦をあてにしたコミュニティ・ケアの方向へ向かっている。彼女はスウェーデンやイギリスの老人福祉に触れて、「老人の世話ゆえに女が職を捨てる。こんなことがあってはならない」というシドウ女史の言葉に共感している。

ホスピスの問題、老人病院、訪問看護、ホームヘルプ活動などの充実を置き去りにして、安上がり在宅福祉に切り換えられてしまつたら、見る側、看られる側の双方にとって悲劇となるらう。

「親を看とる」という美名の下、専門家や社会的サービスから見捨てられた老人たちを、なんの知識も技術も持たぬ私たちがケアしなければならぬ日が迫っている。

その時、男性はどう参加するか、働く女たちはどうかかわるべきかという視点に立たなければ解決の道は見い出せない。

新刊紹介

「母・円地文字」 富家素子

文化勲章を受賞し、数々の豊潤な作品を残して逝った作家円地文字。その最期に至る私的生活の軌跡を、娘の目からつづった本。母というよりも一人の女としての激しい生きざまを感じさせられる。

新潮社 一、一〇〇円

「全訳版 シンデレラ・コンプレックス」

コレット ダウイング著・柳瀬尚紀訳
女性の心に潜在する依存したいという願望（シンデレラ・コンプレックス）を、丹念に、小説的に観察力と描写力で検証していく。女性の内面を見せつけられ、自由と自立のあり方を考えさせられる。

三笠書房 一、〇〇〇円

「老人性痴呆の正しい知識」 金子満雄著

老いで心配なのは痴呆という人は多い。そこで、痴呆とはどうなることかを、軽症から重症へ段階をおってやさしく教え、軽症を早期発見できれば進行を阻止する手だてもあると励ます。

南江堂 八〇〇円

「男の冬じたく・男やもめの生活と意見」

元管理職の男性が、思いがけず妻に先立たれて一人暮らしを始めた。ワープロ、水彩画、読書、旅行と積極的に楽しみ、家事も計画的にこなして好意が持てる。

森茂著
はまの出版 一、三六〇円

「男と女 変わる力学」 鹿嶋敬著

婦人欄担当の新聞記者として、女性パワーの高揚を見つめてきた著者が、フェミニスト的視点に立って男と女の現在を考えている。そこから見えてくる、性の垣根を越えた新しい関係がおもしろい。

岩波新書 四九〇円

平成御所車

我が街、熱海市では市民あげての夏祭りが七月十五・十六日に行われます。町内で山車を制作してコンテストをすることが大きなイベントです。毎年、山車作りには熱が入り、町内会、青年会、婦人会、子供会と各団体が協力して、一か月以上も前から制作に取り組みます。今年は名付けて平成御所車と決まり、青年会の人たちが、それこそ大工さん電気屋さんペンキ屋さんというメンバーが中心になって作りあげました。御所車ですからお姫様を乗せることになり、子供会で五・六年生の女子から抽選で選びました。衣裳は十二単衣風の着物で、婦人会が担当です。子供会や町内会は、山車全体に飾る紙の花を三千個作りました。前日、山車小屋から出されて最終点検

主婦の夏休み

「主婦にも夏休みが必要。旅行でもよし、夏期講座でもよい。充実した時間を過ごし、リフレッシュしよう。」こんな新聞記事が目にとまり、単純な私はさっそく実行に移した。もちろん主人の了解済み。(うん！理解あるなあ……)今までに買って積んでおいた本を数冊かかえ、長野の実家に十日間の居候生活を決めこんだ。始めのうちは歓迎されたが、日に日に母は小言を言いだした。本人は好きな時に本を読み、懐しい同級生に会い、かなり充実した時間を過ごしているつもりだが、母の目には毎日ごろごろしているように映るら

をしていた平成御所車は、目を見張るばかりにすばらしい出来栄であった。電飾が白い花の名にふさわしく、すだれの部分は現代的にレースになっていたのが乙なものでした。

長い綱二本を大人も子供も引いて市内を練り歩きます。苦勞の甲斐あって三位に入賞しました。二日目は朝からどしゃ降りの雨でしたが、雨は、山車を出した直後からまるでそのようにやんで山車が町内に戻るまで降りませんでした。

お祭り好きの熱気が通じたのでしょうか。何はともあれ、今年も無事にお祭りが終わりました。「来年もやるぞ」と思いつつ……。

(N・N)

ホプリ



しい。そして久しぶりの母子ゲンカ。「お前は、

わがままだ。」「どこが?」「どこって全体的に。」「そんなこんなで十日間が過ぎ、本人も私つて、わがままかなあ……。」と不安げに静岡に戻って来た。そしてまた、目に留まった新聞記事は……。「ガマンしなくていい。自分が自分でいい。自分の欲望にめざめれば人はエゴイストになる。」というフェミニニストの女性の送ってくれたメッセージ。

自分に都合のいい記事にばかり目がいく私つて、やっぱりわがままなのかなあ……。

(S・T)

土曜日にお父さんが家にいる

主人は銀行員。仕事、仕事の毎日、帰日も遅い日が続いておりました。ところが、この春から毎週土、日曜日が連休となり、「土曜日にお父さんが家にいる」ことになりました。子供がお父さんと遊ぶのを楽しみにしていた小さいころは、なかなか休みが取れず、さみしい思いをさせることもありました。そのころのことを思うのでしょうか、主人は子供たちと過ごしたいと望んでいるようですが、中三の娘は部活動、小五の息子はサッカーの練習で夕方まで帰って来ません。そして私も用事で出掛けることが多く、土曜日、お休みとなった主人に申し訳ないと思いつつも、私と子供は、それぞれ出掛けてしまいます。

主人も連休に慣れず、はじめのうちは、ほんやりと一日を過ごしていました。私たちの様子を見て考えたのでしょうか、このごろ自分のために時間を使うようになりました。

散歩、読書、そして体力づくりのため、スポーツジムに通いはじめたのです。日曜日は家族一緒に過ごす—と言っても、息子のサッカーの試合の応援に出掛ける程度のことですが……。

働き者の日本人は、余暇の使い方がへただと言われますが、子供たちも学校に拘束されている時間が多く、家族そろって週末を過ごすことが難しくなっています。土曜日にお父さんが家にいる」ことが、特別なことでなく日常的なこととして、自然に受け入れられる社会になってほしいものです。

(M・S)

ねっとわあく情報

○「家庭を考える県民フォーラム」を開催します
時代の進展に伴い、人々の意識が多様化し、特に家庭を持つ婦人の社会参加が増大する中、家庭の機能は大きく変化してきています。
そこで、県民を対象に、家庭をテーマとした意見を募集し、その意見を広く紹介することにより、県民の健全な家庭づくりに役立ててもらうため、「家庭を考える県民フォーラム」を開催します。

・開催日時・会場

平成元年11月14日(火) 13:00~15:30
静岡県総合社会福祉会館 7階ホール

・テーマ

「家庭の役割 男・女」
— 理解し、愛し、支え合う —

・内容

- 1 応募者代表(6人)の意見発表
- 2 パネルディスカッション
コーディネーター
静岡県婦人問題推進会議委員

錦織 淑子

パネラー

教育相談センター所長 藁科 正弘
静岡大学教育学部助教授 落合 良行
静大教育学部附属幼稚園教諭
海野 展由

主婦・母親代表(大井川町)

野口つた江

意見応募者

小林 悦子

・参加者

一般県民

参加希望者は、当日会場までお越し下さい。



賀茂村
清野真由美

学ぶことによって自信が持てます。自信がまた新しい学習への意欲を支えてくれます。今からでも遅くない。今だからこそ学ぶことがあると思います。



静岡市
竹内繁子

知らなかったことを知って気持ちいい。知っていることの再確認もまた気持ちいい。そして少しずつ変わり始めている自分がある。

女性のための情報誌

「ねっとわあく」第15号

平成元年10月

編集・発行 静岡県県民生活局 婦人課
〒420 静岡市追手町9番6号
☎ <0542> 21-2137

表紙デザイン

県浜松繊維工業試験場 小杉 思 主 世

平成元年年度編集員紹介

学ぶことって一生を通じて多方面にあるものだと思います。どんな老い方をしていくのか、それぞれ自分次第なのでですから頑張るしかありません。行動することって大切です。



熱海市
永瀬紀子

これをして、こうなりたいと思ったら素直に挑戦したい。そこから学習すべきことがわかってくる。そこから本と人との「本当に出会える」と思う。



浜松市
内山春美

学んだことを生かし、ライフワークとしている人たちに会い、その熱意に感動した。生き生きした人たちに会うのは清々しい。改めて学ぶ心の大切さを思う。



静岡市
杉山真知子